

タイトル	言語の研究とコミュニケーション：基本的な考え方を顧みる
著者	岡野，哲
引用	北海学園大学人文論集，2： 1-19
発行日	1994-03-31

言語の研究とコミュニケーション

— 基本的な考え方を顧みる* —

岡 野 哲

I

イエスペルセンが文法範疇を立てることで、文法を組織的に記述できると考え、文法範疇を「機能」(function)として確立しようとしたことは、彼の主著の一つ *The Philosophy of Grammar* (1924) に明かである。

イエスペルセンのいう「機能」は、今日でいう機能とは違って、形態もなく意味でもない、文法的な役割である。これは一方では「形態」(form)の、他方の側では「概念」(notion) — すなわち、意味 — のまん中に位置づけられて、ヤヌスの神のように (“Janus-like”), 左右を同時に見据えているものであると考えられた。これを、イエスペルセンは図1¹⁾のように例示している。この図は過去時制 (preterit) を例として取り上げたものであるが、形態としては《[-id], [-t], [-d]; 母音交替プラス[-t]; ゼロ変化; 母音交替; 補充法》を、概念としては《過去時; 現在の非現実; 未来時;

A. FORM :	B. FUNCTION :	C. NOTION :
-ed (<i>handed</i>)	preterit	past time
-t (<i>fixed</i>)		unreality in present time (if we <i>knew</i> ; I wish we <i>knew</i>)
-d (<i>showed</i>)		future time (it is time you <i>went</i> to bed)
-t with inner change (<i>left</i>)		shifted present time (how did you know I <i>was</i> a Dane ?)
kernel unchanged (<i>put</i>)		all times (men <i>were</i> deceivers ever)
inner change (<i>drank</i>)		
different kernel (<i>was</i>)		

図 1

後方転移現在；総称時》を、それらの間にたって結び付ける仲立ちとして、過去時制という機能が位置づけられている。この仲立ちのことを“機能”というのである。

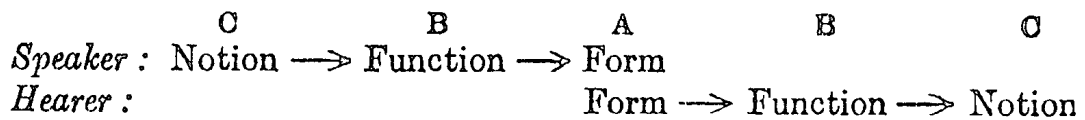


図2

ところが、イエスペルセンは、話し手と聞き手の間の結び付きの中に「機能」を位置づけるという事もしている。話し手は、「概念」→「機能」→「形態」という順序で進み、聞き手は「形態」→「機能」→「概念」と逆に進んでいくという図式を描いているのである²⁾。経験的に認知可能な「形態」A. が話し手と聞き手を結ぶ契機であるが、話し手が伝えようとする意味「概念」C. は、「機能」B. を媒介として「形態」と結び付くのであり、「機能」は話し手、聞き手が共有するものである。(図2参照)

一方、イエスペルセンは、「言語の本質は人間の行為——自分を相手に理解して貰おうとする人の側の行為と、この人の心の中に起ったことを理解しようとする相手の側の行為である。」³⁾とやっている。そして、文法の研究においても話し手・聞き手を無視してはならない、「言語は独立な自然物のように扱ってはならない。」³⁾とも述べている。このように文法範疇を伝達の行為と結びつける事は、言語学史上、青年文法派の生き残りとも言うべき彼⁴⁾にとっては、自然なフォーミュレーションであったとも言える。

また、イエスペルセンが「言語は人間の心理、論理、歴史と結びついているのだ、そういうことを忘れるな。」⁵⁾とやっているのも、同じ様な言語学史的な視点からみると、イエスペルセンの基本的な考え方であったであろうことが理解できる。

言語の記述、説明に言葉の使い手(話者・聴者)をどの様に持ち込むかという問題がここにはある。ソシュールが言語記号を「言の循環(le circuit de la parole)」(=コミュニケーション)の中に位置づけながら、それを、

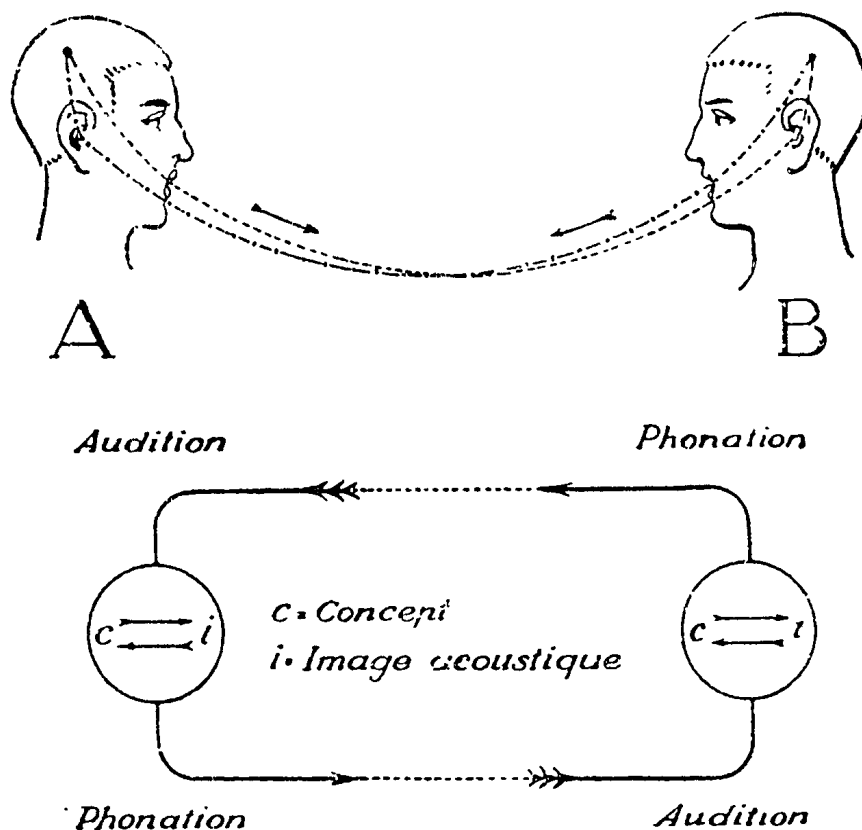


図 3

個人的なものを超えた社会的な存在である「ラング」として捉えなおしたのは、周知の通りである。(図 3 参照)

イエスペルセンは、ソシュールのいう「ラング」としての言語というコンセプトに激しく反発しているが、体系としての言語が、言葉の使い手の外に独立に存在するという思い込みが、受け入れ難いものであったからである。

ところで、往時のわが国ではイエスペルセン流のやり方の希有な批判者⁷⁾でもあった中島文雄は、ソシュールの立場を拒絶しながら、「ラング」の様な体系としての言語などは、「実在」ではなく、「抽象名詞の実体化」である、「観念的構成物、虚構」であると言ったのである⁸⁾。そして、言語の研究においては「虚構」を対象とすべきではなくて、「言語を現実の談話として捉え」ということを基本的な態度とすべきだと言ったのである⁹⁾。

このように、言語を「現実の談話として」捉える立場からすると、イエスペルセンは「言語の本質は行為である。」と、「現実の談話を考える」に

等しい事を言いながら、中途半端で、実際はそれにふさわしい研究方法をとっていない、という批判になるのであろうと思われる。

しかしながら、中島文雄は、彼がいうように現実の談話そのものを「考え」ていたであろうか。彼は、アントン・マルティに従って、言語活動は主に「二重に意図的な記号付与」であると言いう。「二重に」と言うのは、「一次的に意図された」記号付与と「二次的に意図された」記号付与というものを想定し、前者が後者に媒介 (vermitteln) されるという事である。マルティの言葉では、「二重に意図された」というのは、*〈eine doppelte Intention beim absichtlichen Zeichengeben〉*¹⁰⁾ と言われるが、「二重に意図的な記号付与」とおなじことである。「二重」とは、「一次的記号付与」(*ein primär intendiertes Zeichengeben*) と、「二次的記号付与」(*ein sekundär intendiertes Zeichengeben*) が重なっているという事である。

二次的記号付与は、話し手が自分の心の中におこった事を表現 (*äussern/ausdrücken*) すること、つまり、告知 (*Kundgabe*) である。これに対して「一次的記号付与」は、二次的記号付与「告知」、すなわち「心の中におこった事を知らせること」(*die Kundgabe des eigenen psychischen Lebens*¹¹⁾) を通じて、聞き手の精神生活を感化する事である。「聞き手の精神生活を感化する」ことを、マルティは、「聞き手の他者としての精神生活に対する感化、あるいは支配」(*eine gewisse Beeinflussung oder Beherrschung des fremden Seelenlebens im Hörenden*¹²⁾) と言っている。このように、告知によって「他人の中に、ある心的現象を喚起する」¹³⁾ ことが「伝達」(*Mitteilen*) なのである。

そこからは、中島文雄の意味論では、結局、「伝達」において、「自分の心の中に起る精神作用」とほぼ同じ精神作用が聞き手の中にも喚起される筈であるという想定にたって、聞き手ではなくて、「自分の」心の中に起る精神作用を、言葉の意味として分析するのである。このように、自分の心の中に起る精神作用の分析をすすめる事が適切であるという根拠は、何を対象としているかは別として、心的作用そのものは、どの人についても、それぞれ異なっているという保証がない、という事である¹⁴⁾。この方法は彼

が依拠するフランツ・ブレンターノを祖とする独逸学派の哲学的・心理的方法¹⁵⁾である。

このようにして、中島文雄の場合も、イエスペルセンとは違った意味で、言語を「現実の談話として捉える」という当初の意図を貫徹していないと言える。すなわち、現実の談話における片方の participant¹⁶⁾ が捨象されているのである。

また、相手の精神生活を感化しようと意図してもその通りにいかない場合、真実を告知せず虚偽の表出によって真実を伝達しない場合、ある表現が無内容である場合、また、文法の例文のような場合がある。中島文雄には、これらに対する言及があり、真実でなくても、あるいは、「現実の表現であることを知らなくても、理解ということは、一般にある心的作用を喚起することになっているという意識さえあれば、成り立つ。」¹⁷⁾と、説明している。即ち、告知のときの表現の中身である「心の作用」は、現実の中味の保証がない場合でも理解できるという事になる。

これは、もはや、その時のその場での現実の談話を離れた意識の問題に他ならない。つまり、彼のいう「……（伝達）することになっているという意識」とは、告知が、伝達を予定している (anticipate) ということである。すなわち、現実の今の意識それ自体より後に起るであろう事を、前もって想定しているのに他ならない。これは、当然ながら、「現実の談話」¹⁸⁾ そのものには、ないものである。

その様に考えると、それを媒介として伝達されるものを理解すること自体のかわりとして、告知される表象をもって置き換えている事になる——むしろ、「伝達」は問題とせずに、「告知」だけで済ませているのであると考えられる。これは、中島文雄が意図したような、「現実の談話」として言語を扱う事とは違うのである。

しかし、一般的に、ある表現が、非常に高い規則性ないし法則性をもって、ある出来事、ある思想を告知 (inform/kundgeben) する機能をもつことは事実であり、否定できない。表現される意味と表現とのこの規則的な対応から、言語によって表現される出来事・思想は、当然、相手に伝達さ

れ理解されるものだという考え方が生まれ、一般に受け入れられるようになる。つまり、言語のシステムが規則性、法則性に依存して比較的安定していることから、記号の独立性 (independence)、自律性 (autonomy) が考えられるのは自然な事である。

そして、この考え方を発展させると、言語は情報伝達の手段、道具であり、言語はメッセージの伝達媒体、乗り物 (vehicle) であると言うような命題にまで、段々に展開していくであろう。これは比喩的な言い方であって、実際はそうでない事を誰でも知っているのである。ただ、厄介なことを捨象して、単純化して説明するに過ぎないのである。単純化した通りのプロセスにおいて伝達が起ると思うのは間違いである。

II

「ラング」のレベルでコミュニケーションを考える限り、このように、伝達・理解について陥りやすい陥穽がある。それに対して、まさに、「ラング」を運用してコミュニケーションを図る過程の研究である語用論からは、いろいろと有益な示唆が与えられる。伝達と告知の側面の関係を、単に第一次記号付与、第二次記号付与の様に単純化しないで取り扱う事は、語用論の仕事である。

例えば、G. リーチはコミュニケーションの過程をモデル化して、図4の

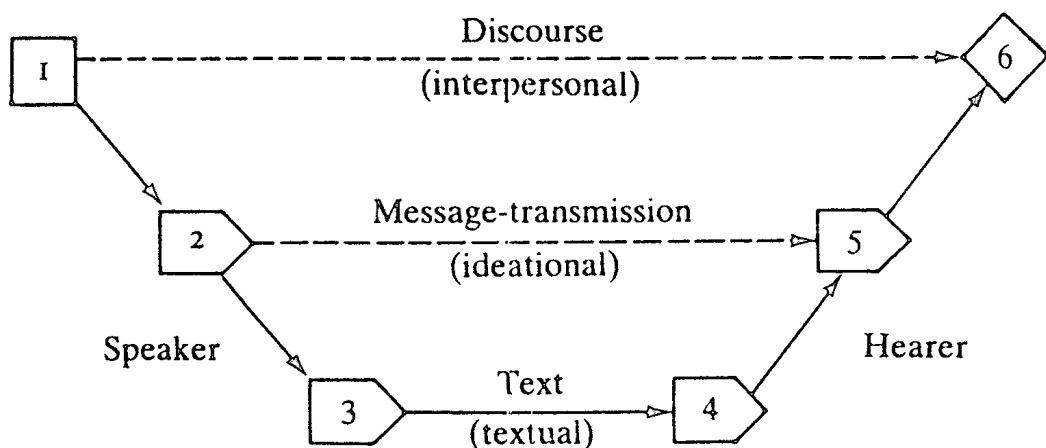


図4

ように示している¹⁹⁾。この図の〈ideational〉と注釈のついたレベルで概念化が起こり、頭に浮かんだ思想を概念的な内容を備えたメッセージ (message) として整える。すなわち、[1] から [2] への過程である。そして、[2] がメッセージとして聞き手に伝わる限りにおいて、伝達されるのは、告知の内容に相当するものである。

このレベルから先へ進んで、メッセージに言語的な形を与える記号化 (encoding) が起こる。すなわち、[2] から [3] への過程である。ここに至って、テキストが構成される。テキストは、音声形態ないし文字形態をとるので、話し手から聞き手に ([3] から [4] へ) 直接的に伝達 (transmission) される。これが、最も具体的なプロセスである。

一方、聞き手は、上のレベルに ([4] から [5] へ) 向かって、テキストを解読 (decode) してメッセージを復元する。このように、概念的な形に整えられる表象は、直接に伝わるのではなくて、聞き手がテキストを解読した結果として間接的に受け取る。それ故、この間接的な過程は破線で示される。そして、次のレベルへ ([5] から [6] へ) 向かって、〈interpersonal〉と表示されるものを含めて——聞き手=話し手の関係、話をする目的、時と場所の様な場面の要素、等を含めて——聞き手が更に話し手の意図した何かを読み取ることになる。

この過程全体が、ディスコースである。

この様なモデルの想定は、中島文雄の意味論や素朴な情報理論の枠組みからずっと先へ進歩したものだとは必ずしも言えない。問題は、メッセージの全体が聞き手の頭の中にイメージとして表象されるのは如何にしてか、であって、これが一番重要である。

リーチなどが語用論で説明を更に前進させている側面は、「行為としての言語」(イエスペルセン)を談話——ディスコース——として捉え直すという観点である。ディスコースには、異質で多様な要素が含まれる。話し手・聞き手の間にある具体的な関係、談話をかわす場面における非言語的な多様な要素、話し手・聞き手が共有しているかも知れない背景的な知識、文化的な制約、などである。従って、ソシュールの言うような体系としての

言語、ラングと同じ様にしてディスコースを考えることは不可能である。

しかし、話し手は言語記号を材料としてテキストを作り上げ、そして、これを聞き手に渡す——普通は、聞き手がそれを「理解する」(中島)する——というプロセスは間違いなく存在する。この際、テキストからメッセージを受け取り、理解することがどの様にしておこり得るか、の説明が重要である。そこを解明しないと、コミュニケーション、あるいは、「理解」ということは、説明できない。言葉とコミュニケーションの関係を単純化して、不完全な形でイメージする事は好ましくないと思うのである。

この事に関連して、具体例を少し取り上げてみると、まず、言葉抜きの伝達行為が考えられる。例えば、

[Context of situation: Domestic evening scene:

husband [A] and wife [B] watching TV]

A indicates by pointing and tapping his ear that he can hear the telephone.

B points to the cat asleep on her lap.

A shrugs and gets up.²⁰⁾

即ち、夫と妻が自分の家でテレビを見ているという場面である。夫が耳を指さして、軽く触れて、電話の音がすることを知らせようとする伝達の意図が認めらる。

妻の方は、自分の膝の上に寝ている猫を指さすだけで、口では何も言わない。

それに対して夫は、肩をすぼめて立ち上がって行く。もちろん、電話に出るために電話のある所へ行くに違いない。

夫と妻は、それぞれメッセージを身振りで伝えているが、これには二つの側面がある：

(1)お互いに、何かを伝達しようとしている意図を、動作が示していること

いう事、

(2)伝達すべき情報を、場面の中の特定の項目としてとり出して、そこに相手の注意を向けているという事

である。ここでは、電話の音が聞えることを耳を指さすことで示す、そして、膝の上に寝ている猫が邪魔で立ち上がれない事を、猫を指さすことで示す。つまり、自分の耳、および、膝の上に寝ている猫、という場面の中の特定の事物に注意を向けることを行っているだけである。

これを引金(trigger)として、相手の心の中にある事を呼び起す(evoke/hervorrufen)のである。

この場合、相手に対して伝えたい事は、「電話に出てくれ」という依頼と「それには応えられない、お断りします」という謝絶である。これが、言葉によらないで、その動作によって理解されるのである。

しかし、この段階にとどまる限りでは、掘り下げは充分でない。中島文雄によれば、第一次的伝達意図が、身振りという二次的告知の行為を媒介として達成された、と説明されるであろう。

問題は、もう少し子細にわたって考察する必要がある。夫が妻に何かを伝えたいと思っている事を伝達意図(communicative intention)²¹⁾と言うが、伝達が成り立つためには、妻の方で夫の伝達意図を意識しなければならない。そのために、夫の仕草がそういう伝達意図を読み取るにふさわしいものであるという条件が充されなければならない。と同時に、それを受けとめる妻の方では、夫の伝達意図を読み取る心の働きがなければならない。送る側の努力ばかりでなくて、受け手の側の能動的な心の働き(effort)が条件となる。

そこで、夫の側の伝達意図が達せられるために妻の側で働かせる心の動きは、伝達意図を察して、伝達内容に関する告知の意図(informative intention)²²⁾を推察する事である。推察するとは、想像力を働かせ、推理する事である。指を耳へもっていくという、それ自体、本来は何の意味もないかもしれない動作から、何かの意図を推し量り、思い当てることである。

この推理とか推察、すなわち〈inference〉は、ごく単純な、当てずっぽ

うな場合もあるが、時には、演繹的な推論、すなわち〈deduction〉とすべき形式に当てはまる推理であることもある。そして、この推理がどのような形を取るのか、その心理的なプロセスはどのようなものか、どのような条件のもとで成立するのかを考察する必要がある。

言葉を使わないこの様なコミュニケーションの状況は、到る処に、いろいろな形で存在するが、いま考察した具体例と同じ行動のパターンとして、言葉によるコミュニケーションのプロセスがある。

Ex. A: That's the telephone.

B: I'm in the bath.

A: O.K.²³⁾

「電話だよ」——「いま、お風呂なの」——「じゃ、いいよ」という風に言っている、この発話は非常に不完全な発話である。

「電話が鳴っているよ。」は、起っている出来事を知らせる第二次的な告知に相当するが、本当に知って貰いたいのは「自分の代わりに電話に出て欲しい。」という依頼である。この場合、言葉の表現できちんと告げてもよさそうなものを、やっていないのである。しかし、それでも、伝達の目的は、ここでは、達せられている。

妻の「いま、お風呂よ。」という返事にしても同じである。

これらの場合、言葉を使っているが、身振りの場合と同じように、非常に暗示的な言葉使いで、「電話が鳴っていることを知らせている以上は、出て欲しいという積もりだな。」と、推測するのは、妻の側の協力的な推理であり、表現が十分に明示的 (explicit) でない部分を妻自身が補っている。また、「風呂に入っていれば、電話に出られない訳だ。」というのは夫の側の推理であるが、これも協力的な推理である。

この様に、言葉は、言葉以外の多くの要素によって補足されて伝達の働きをする。この会話の断片から考察されるのは、言葉が身振りと同じほどに暗示的である事、部分的にしか明示的でない事、多くの事を言い残して

いる事である。そして、同時に、これらの発話は、身振りと同じように指示的 (ostensive)²⁴⁾ —「指し示すもの」である。身振りで電話が鳴っていることに注意を向けさせる指示の行為、猫を指さして動けないことに注意を向けさせる指示の行為と同じ様に、「おい、電話だ。」とか、「いま、お風呂よ。」という発話も同じように〈ostension〉の行為であると言える。

そして、その上に、「テレビを続けて見たいから、電話に出て欲しい。」という依頼のメッセージ、「いま、猫が膝の上で寝ているから／お風呂に入っているから、電話にでる訳には行かないのだよ。」という断わりのメッセージは、この場合の発話には表現されていないのだから、聞き手が推理や想像の中で、自分で組み立て (construct) していると、考えなければならない。

この様に、聞き手の方が推理や想像によってメッセージを自分で組み立てることで、この会話の断片が示すような伝達が成立する。言葉 — テキスト — も第一に相手に注意を向けさせる要請 〈request〉²⁵⁾ だと考えられ、また、聞き手に「自分のテキストを組み立てさせる指図〈instruction〉²⁶⁾ である」と言われるのである。そして、注意を向けさせられた聞き手の方が、推理や想像の働きによって、表象を組み立てるのであり、その様にして組み立てられた表象を、理解された内容、伝達されたメッセージであると受け止める他はない。

複雑な言語表現においても、基本的に同じである。なぜならば、言語による伝達行為の中で、表象する世界を言葉で全く余す処なく表現する事、全ての点で明示的である事は不可能だからである。必ず、聞き手、読み手の解釈によって補われなければならない部分がある。また、同時に、話し手と聞き手が、全く同一の、即ち、互いに寸分違わぬコピーであるような表象を思い描くということは保証されていないのだから、即ち、互いに類似の表象 — 中島文雄によれば、種的に等同の表象 — を描くことが出来るだけなのであるから、言葉は、しばしば、表象暗示〈Vorstellungssuggestiv〉²⁷⁾ の段階にとどまる。

この様なディスコースの様相を解明する理論の枠組みとして、H.P. グラ

イス²⁸⁾の「協調の原理」(The Cooperative Principle)と「行動原理」(maxims), J.R. サール²⁹⁾の「言語行為」の理論, さらに, D. スパーバー＝D. ウィルソン³⁰⁾の「レリヴァンスの理論」などに言及しておく。また, 言葉, 即ち, ソシユールのいわゆる「パロール」がコミュニケーションの中で果たす役割は, もちろん, 非常に重要であるが, テキストとしてみる限りに於て, パロールは限定的な役割しか果たしていない。一方, 言語, ソシユールのいわゆる「ラング」の側面から見ると, コミュニケーションとの関係が「パロール」よりも更に間接的にならざるを得ない事を付け加えるにとどめる。

III

さて, 言葉により, 話し手・書き手が意図した伝達内容をコミュニケーションするとき, 特に, 問題なのは, 次のような場合である³¹⁾ :

- 1) 虚偽の発言, いわゆる, 嘘;
- 2) 真意を隠ぺいする発言;
- 3) 間違いを含む発言。

いわゆる「嘘つき」という性格的なものは, その人が嘘つきであるという個人の特徴として見抜くことが出来れば, 問題にする必要はない。しかし, 政治的な力を持つ嘘は, 社会的な信用をともなって発せられるので, 非常に重大で, 嘘か真実かを見分けること重要である。

また, 真意を隠すために, 人は様々なやり方で相手を煙に巻くが, ふざけて相手をからかうものから, 何か特別な意図をもって煙に巻く場合まである。これは, 真実を伝える方法としての皮肉, アイロニー³²⁾, 逆説などとは違う。

間違いは, 気づいた側で訂正を加える事ができる限りにおいては, あまり罪深いものではないが, 間違った考えが長いあいだ真実であるかのような顔をしてまかり通ることがないように, それなりの努力と条件が揃っていることが必要がある。

こうしたことが問題になるのは、我々が真実を生活の基礎においているためであり、きわめて平凡な日常の生活さえも、嘘や間違いをもとにしては成り立たないからである。この平凡な真実から、言語によるコミュニケーションを考えてみることも重要である。

言語によりコミュニケーションを図ることは、テキストを組み立ててメッセージを送り、相手に何を考えるべきかの示唆を与え、相手の協力により目的を果す事である。この過程の全体をディスコースと呼ぶとすると、その中で言語——即ち、一定の形をもち、一定の思考の様態と結び付いている記号のシステム——がどういう使われ方をするか、どの様な役割を果すかを確認することが重要である。

言語が認識と結び付いて果す役割について、R.A. チャーウィッツ＝J.W. ハイキンズ³³⁾は、認識上有意義な修辞法の五つの機能を掲げている：

- 1) 特殊化 (differentiative) の機能：即ち、頭の中に、莫然とした、あるいは、未分化の混沌の状況にあるものを、言葉によって、鮮明なものにする過程が、ディスコースを通じて完全なものになるという事。言語を使うことによって、弁別、特殊化が行われる事を、〈intrapersonal communication〉と言う。心の中で自分と、対自己的なコミュニケーションを行うことが、レトリックの最初のステップである。
- 2) 連合的 (associative) 機能：〈intrapersonal〉なディスコースの過程や、その他のディスコースの過程を通じて、様々な認識の要素が結び付いて、豊かな全体を構成するという方向で展開していく事。レトリックはその上で不可欠な要素を含んでいるという事。
- 3) 保持的 (preservative) 機能：保持、保存の要素とは、特殊化され、連合的に豊になる認識が、ディスコースによって顕在化し、話し言葉・書き言葉として形が現われ、記憶され、記録される事。思想は、たとえ間違いであっても、繰り返し語られ続けることによって残る。文字によって残る。残っていればこそ、正しいか間違っているか、の議論をすることができる。
- 4) 評価的 (evaluative) 機能：認識が正しいか否かについては、批判的

に評価を受けないと正しい認識、〈knowledge〉にはならない。それはディスコースを通じて、人と人との間の対人関係において検討する、あるいは、自分の内部で、自己内的にこれを検討し、評価し、洗練していくということである。

- 5) 展望的 (perspectival) 機能：全ての認識はそれぞれ一定の視点 (パースペクティブ) にたって行われる事。完全に、普遍的に間違いない認識の視点は殆ど考えられない。従って、レトリック=ディスコースによって正しい認識を構成しようと言うときには、必ず一定の視点から行われているのであって、視点が無限の広がりを持つものでない以上は、絶対に真であるような認識に一挙に到達すると言うようなことはないという限界がある。しかし、持続的に正しい認識への前進を進めることは可能である。

と、この様に言う。

この「認識」〈knowledge〉という言葉は「知識」と言い直してもよいが、これは、真実として証明し得るもの、また、真であると信じられること、即ち、信念 (belief) であり、持続的に持ちこたえられるものを言う³⁴⁾。私達が基本的に本当だと信じられる事を基にして生きている限り、日常生活から、抽象的な問題、非現実の問題まで、我々の考えていることが明確に分析され、豊に膨らみ、忘れられずに保持され、しかも、正しく評価され、他の考えと視点の違いを認めあいながら、発展することが重要である。

認識上の役割をディスコース——すなわち、コミュニケーション——が担っているというチャーウィッツ=ハイキンズの考えには、傾聴すべきものが大いにある。ディスコースの適切な組み立てであるレトリック抜きには、我々の認識、知識の蓄積と前進はあり得ないと考えられるからである。

従って、ディスコースの成立をどの様に構想するか、が重要であり、いわゆる言語——ラング——をもってコミュニケーションの手段であるとするような簡略化したコンセプトには満足すべきではない。形式としての言語だけではディスコースは成立しない。それをどの様に利用すればコミュニケーションに有効なディスコースとなるか——即ち、レトリックの問題

を考えることには重要な意味がある。

(1994.2.28)

註

*本稿は、北海道大学退官記念最終講義(1993年2月23日、北海道大学言語文化部)の主要な部分について、加筆・整理したものである。

1) Jespersen (1924), p.56.

2) *Ibid.*, p.56 f.

3) *Ibid.*, p.17.

4) イェスペルセンは、主として英語学者として位置づけられるであろう。しかし、例えば、彼は自伝の中で、青年文法派の旗頭の一人ヘルマン・パウル(1846-1921)の『言語史原理』(*Prinzipien der Sprachgeschichte*)に非常に大きな刺激を受けた事を二度にわたって書いている(イェスペルセン(1962), p.36 および p.137)。また、彼がソシュールに対して示した反発からみると、彼はソシュールのような青年文法派から離れた立場をとらなかったと言ってよかろう。Jespersen (1946), pp.11 ff. ならびにパウル(1965), pp.10 ff. の訳者解説を参照。

5) Jespersen (1924), p.344 f.

6) Saussure (1955), p.27 f.

7) 中島文雄は、イェスペルセンは「優れた言語史家であるが哲学者ではないから」言語の意味と文法の原理の「議論になると独断が多く全面的には賛成し難い。」(中島文雄(1941), p.37)と言っている。

8) 中島文雄(1948), p.168.

9) 同書, p.165.

10) Marty (1976), p.490.

11) *Ibid.*, p.284.

12) *Ibid.*

13) 中島文雄, 前掲書, p.8.

14) 同書, p.188 f. および, 中島文雄(1949), p.89. 参照。筆者の見解については、岡野哲(1977), p.3 f. と p.25 註7) ならびに註8) を参照。

15) Brentano (1968-1973) 参照。

16) Firth (1957), p.182. すなわち、話し手・書き手 (addressor) または聞き手・読み手 (addressee) をいう。

17) 中島文雄, 前掲書, p.29.

- 18) 同書, p.165
- 19) Leech (1982), p.59.
- 20) Brown and Yule (1983), p.228.
- 21) Lyons (1977), p.732 f. および Sperber and Wilson (1986), p.29
- 22) Sperber and Wilson, *ibid.*
- 23) Brown and Yule, *op. cit.*, p.228. [Quoted from H.G. Widdowson, *Teaching Language as Communication*, Oxford U.P. 1978, p.29]
- 24) Sperber and Wilson, *op. cit.*, p.49.
- 25) *Ibid.*, p.155.
- 26) E.F. Prince, "Toward a taxonomy of given-new information" in P. Cole (ed.), *Radical Pragmatics*, Academic Press. 1981, p.235. [Quoted by Brown and Yule, *op. cit.*, p.182]
- 27) Marty, *op. cit.*, pp.383 ff.
- 28) H.C. Grice, "Logic and conversation", in P. Cole and J. Morgan (eds.), *Syntax and Semantics 3; Speech Acts*, Academic Press. 1975, pp. 41~58.
- 29) Searle (1969).
- 30) Sperber and Wilson (1986).
- 31) この問題は、日常言語哲学派が sincerity/insincerity の条件としてとりあげるものである。Austin (1975) および Searle, *op. cit.* 参照。
- 32) Leech, *op. cit.*, pp.142 ff.
- 33) Cherwitz and Hikins (1986), pp.92~111.
- 34) *Ibid.*, pp.25 ff. 彼らは "... conceiving of knowledge as persistently justified true belief" (*ibid.*, p.92) のように表現する。

参考文献

- Austin, J.L.: *How To Do Things With Words*. Harvard U.P. 1975.
- Brentano, Franz: *Psychologie vom empirischen Standpunkt*: 1er~3er Band
Felix Meiner Verlag. 1968~1973.
- [English Version translated by A.C. Rancurello *et al.* Routledge & Kegan Paul. 1973.]
- [French Version translated by M. de Gandillac. Aubier. 1944.]
- Brown, Gillian and George Yule: *Discourse Analysis*. Cambridge U.P. 1983.
- Cherwitz, Richard A, and James W. Hikins: *Communication and Knowledge*.
edge. University of South Carolina Press. 1986.

- Firth, John R.: *Papers in Linguistics 1934-1951*. Oxford U.P. 1957.
- Jespersen, Otto: *The Philosophy of Grammar*. George Allen. 1924.
- Jespersen, Otto: *Mankind, Nation and the Individual from a Linguistic Point of View*. George Allen. 1946.
- イエスペルセン, オットー／前島儀一郎訳：『イエスペルセン自叙伝』研究社。1962 (昭和 37 年)。
- Leech, Geoffrey: *Principles of Pragmatics*. Longman. 1982.
- Lyons, John: *Semantics 2*. Cambridge U.P. 1977.
- Marty, Anton: *Untersuchungen zur Grundlegung der allgemeinen Grammatik und Sprachphilosophie*. Georg Olms Verlag. 1976.
- 中島文雄：『英語学研究方法論』(研究社英米文学語学講座) 研究社。1941 (昭和 16 年)。
- 中島文雄：『意味論』研究社。1948 (昭和 23 年)。
- 中島文雄：『文法の原理』研究社。1949 (昭和 24 年)。
- 岡野 哲：“「内部知覚」とは何か？ — 中島文雄博士の方法について(1)”『北海道大学外国語・外国文学研究』第 23 号。北海道大学文学部。1977。
- ヘルマン・パウル／福本喜之助訳：『言語史原理』講談社。1965。
- Saussure, F. de: *Cours de linguistique générale*. Payot. 1955.
- Searle, John R.: *Speech Acts: An Essay in the Philosophy of Language*. Cambridge U.P. 1969.
- Sperber, Dan and Deirdre Wilson: *Relevance*. Basil Blackwell. 1986.

Linguistics and Communication

— an Essay in Retrospect

Satoshi OKANO

SUMMARY

In 1920's, Otto Jespersen emphasized the importance of the processes underlying speech. In practice, however, his linguistic description does not necessarily testify to consistent regard to the process of communication.

Fumio Nakajima, a critic of Jespersen in Japan, drew upon Anton Marty's philosophy of language and distinguished two levels of communication, namely, the level of <Kundgeben> [=informing] and that of <Mitteilen> [=communicating]. Nakajima's work in grammar and semantics, however, is in the main restricted to the analysis at the level of informing.

This limited perspective on the part of linguists will be liable to reinforce the general public's simplistic view of speech communication, such that language is a vehicle of thought, enabling a person to almost automatically communicate with his or her partner. But recent developments in pragmatics, such as seen in the works by H.C. Grice, G. Leech, D. Sperber=D. Wilson etc. reveal analysed details at the levels of informing and communicating. These will fill the gaps in the general outlook on language which stem from linguists' restricted view of speech communication.

As well as the structure of speech communication, the truthfulness

of what is communicated in speech is of paramount importance to human life in society. Rhetoric, therefore, will be of increasing relevance as the pursuit of appropriate formation of a truthful text which realizes truthful speech communication.

Keywords: *language; communication; rhetoric*